

令和6年度第6回 感染症発生動向調査協議会

令和6年9月18日

月番：馬場 尚志

1 前月の感染症発生動向について（2024年第31週～35週・8月）

<全数把握対象疾患>

- ・ 結核は毎週報告あり（本年累計の対前年同期比 123.3%）、年代別にみると 20～29 歳が 8 例（結核 6 例、潜在性結核感染症 2 例）と最も多かった。
- ・ レジオネラ症は 3 例報告あり（本年累計の対前年同期比 42.9%）。
- ・ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症が 1 例、侵襲性肺炎球菌感染症が 4 例報告あり、本年累計の対前年同期比はそれぞれ 175%、119%である。
- ・ 急性脳炎 1 例の報告あり（本年累計の対前年同期比 1100%）。
- ・ 腸管出血性大腸菌感染症、E 型肝炎、A 型肝炎、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症、ジアルジア症が、それぞれ 1 例ずつ報告あり。
- ・ 後天性免疫不全症候群が 5 例報告あり（いずれも無症候性キャリア）。
- ・ 梅毒は 18 例報告あり（本年累計の対前年同期比 96.8%）。うち 12 例が早期顕症で（本年累計の対前年同期比 104.3%）、男性 8 例、女性 4 例であった。

<定点把握対象疾患>

- ・ 新型コロナウイルス感染症は、第 31 週に定点あたりの報告数が 18.1 であったが、第 35 週には 9.4 まで減少した。
- ・ インフルエンザは、定点あたりの報告数 0.4 以下で推移していた（前年同期比 39.8%）。
- ・ A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、前月比 54.8%となったが、前年同期比は 165.5%（2019 年同期比 180.0%）であった。
- ・ 手足口病は、第 33 週に定点あたりの報告数が 3.6 まで減少したが、第 35 週は 6.1 と再度増加がみられた。
- ・ 流行性角結膜炎が、東濃圏域において第 32 週から第 35 週にかけて増加がみられた。
- ・ マイコプラズマ肺炎は、第 33 週の定点あたりの報告数 3.4 をピークに増加がみられた。
- ・ 性感染症定点疾患は、いずれも前年とほぼ同様の発生状況である。

2 検討すべき課題

- ・ 今冬に向けた感染症流行に対する備えについて
（予防、診断・治療、啓発など）

3 情報提供すべき事項

- ・ 結核・呼吸器感染症予防週間（9月24日～9月30日）
（参考）大阪府 <https://www.pref.osaka.lg.jp/o100050/iryu/2024tbweek.html#keihatsushizai>

4 情報提供（月番委員専門分野から）

- ・ 20 価肺炎球菌結合型ワクチン（商品名：プレベナー20）
 - 10月1日から定期接種での使用開始（プレベナー13は9月30日）で販売終了）

5 その他（感染症対策推進課から）

（国通知・事務連絡）

- ・ 世界的なポリオ根絶に向けた、不必要なポリオウイルス（1型及び3型）の廃棄について（周知及び協力依頼）
- ・ 急性弛緩性麻痺の情報提供について（依頼）
- ・ ダニ媒介脳炎に関するリスクアセスメントについて（情報提供）
- ・ 小児の肺炎球菌感染症に係る定期の予防接種の実施方法について
- ・ 2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）開催に伴う感染症サーベイランスの取組強化について
- ・ 新型コロナワクチン接種後の副反応を疑う症状に関する研究への協力について

（県公表資料）

- ・ インフルエンザ様疾患による休校等の措置について（今シーズン初）

<検討結果>